資料 3-1

H28 シカ年度エゾシカ個体数調整事業（遺産地域） 案

A. 知床岬地区

※資料 3-1 参考①の別表参照。

1. 経緯・課題

・H28 シカ年度は、H19 シカ年度より 10 シーズン目の捕獲。仕切柵整備からは 6 シーズン目となる。

・H19 シカ年度以降、航空カウント数および捕獲数は減少傾向にある（表 1 、図 1）。

・H27 シカ年度の捕獲終了時点の推定生息密度は、16.4 頭/㎢となり、目標の 5 頭/㎢を達成できず。

・H27 シカ年度の厳冬期にヘリコプターを移動手段として実施した大人数（18 名）の捕獲（3 月 3～4 日）では、捕獲数は 3 頭（前年同期 57 頭）にとどまった。5 月 18～20 日および 6 月 21～23 日に実施した少人数（6～7 名）の待ち伏せ狙撃では合計 7 頭を捕獲した。

・5～6 月の捕獲には猟犬 1 頭も試験的に投入したが、犬による追い出しおよび捕獲増加効果は、今回の知床岬における捕獲では認められなかった。

・現状では、厳冬期における大人数による捕獲は、費用対効果が低いと考えられる。ただし南側（ポロモイ・カブト岩・ペキンノ鼻等、図 2）からの流入が大量にあれば、厳冬期における大人数による捕獲は有効であると考えられる（H26 シカ年度の例）。

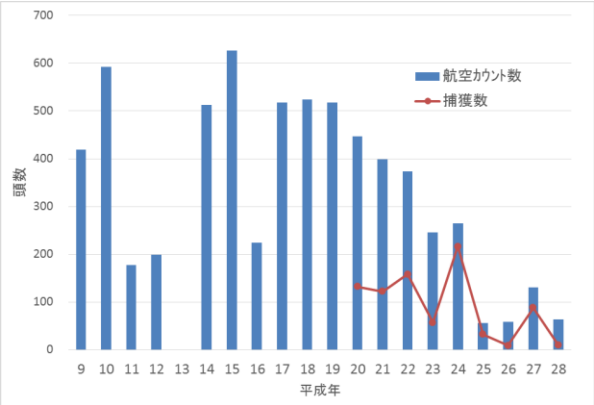

図 1. 航空カウント調査による知床岬海食台地上のエゾシカ確認数と捕獲数の推移.
※平成 13(2001)年は調査なし

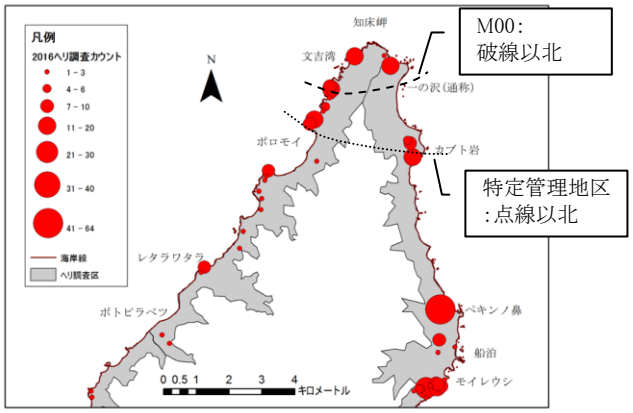

図 2. 2016 年航空調査におけるエゾシカ発見位置（101～118 頭：特定管理地区、57～63 頭：M00）.

2. 方針

・H27 シカ年度と同規模の巻き狩り（15 名程度、現地 1～2 泊）を厳冬期に 1 回実施する。さらに流氷開けに少人数の待ち伏せ捕獲（2～3 泊）を、4～5 月中に 2 回程度実施する。

・仕切柵を最大限に捕獲に活用するため、捕獲直前まで一の沢付近等の特定の扉を開放し、シカの出入りを促進する。待ち伏せ捕獲ではシカの通り道となった扉を、狙撃ポイントとする。

※次年度以降、厳冬期の捕獲については、航空カウント調査で知床岬先端部地区へのシカ流入が大量に確認された場合のみ実施することとする。

※捕獲目標頭数合計 ： 51 頭

【H29 シカ年度の捕獲前推定生息数を 5 頭/㎢以下にするため）】

3. 捕獲事業内容案（知床岬地区）

①.　流氷期　ヘリ捕獲（中規模隊　宿泊）　１回　（H27 シカ年度と同じパターン）

●期間:　2～3 月に 1 回(航空カウント調査終了後)。1～2 泊。

●人員規模:　15 人程度

●実施方法:　仕切柵を使った巻き狩り

②.　無積雪期　船捕獲（小規模隊　2～3 泊）　2～3 回　（H27 シカ年度と同じパターン）

●期間:　4～5 月に 2～3 回。1 回 2～3 泊程度

●人員規模:　5 人程度　（＋　犬）

●実施方法:　草原上狙撃、林縁･森林内待ち伏せ狙撃
勢子(もしくは犬)による仕切り柵を利用した追い込み

●特記事項　トレッカーや漁業者に対する安全対策、草本が繁茂する前に実施

＊死体回収は、最終日または後日船により人員規模 10 名程度・日帰りで実施。

B. ルサー相泊地区

※資料 3-1 参考①の別表参照。

1. 経緯・課題

・H27 シカ年度はルサ囲いわな（6 年目）で 16 頭、相泊囲いわな（3 年目）で 32 頭、流し猟式 SS（5 年目）で 31 頭、合計 79 頭を捕獲。

・H27 シカ年度の航空カウント数（R13 で 141 頭）から、航空カウント後捕獲数 64 頭を差し引いた推定生息数は 77 頭、推定生息密度 3.1 頭/㎢となり、第 2 段階目標の 5 頭/㎢は暫定的に達成（モニタリングユニット R13 = ヘリカウント調査区 U12 南部 + U13 + U13s = 24.68 km²）。

・5 頭/㎢以下を維持するには生息数を 123 頭以下にする必要がある。ただし R13 北部のアイドマリ川～クズレハマ川では、物理的に捕獲が難しく、ほぼ捕獲圧がかかっていない（図 3）。

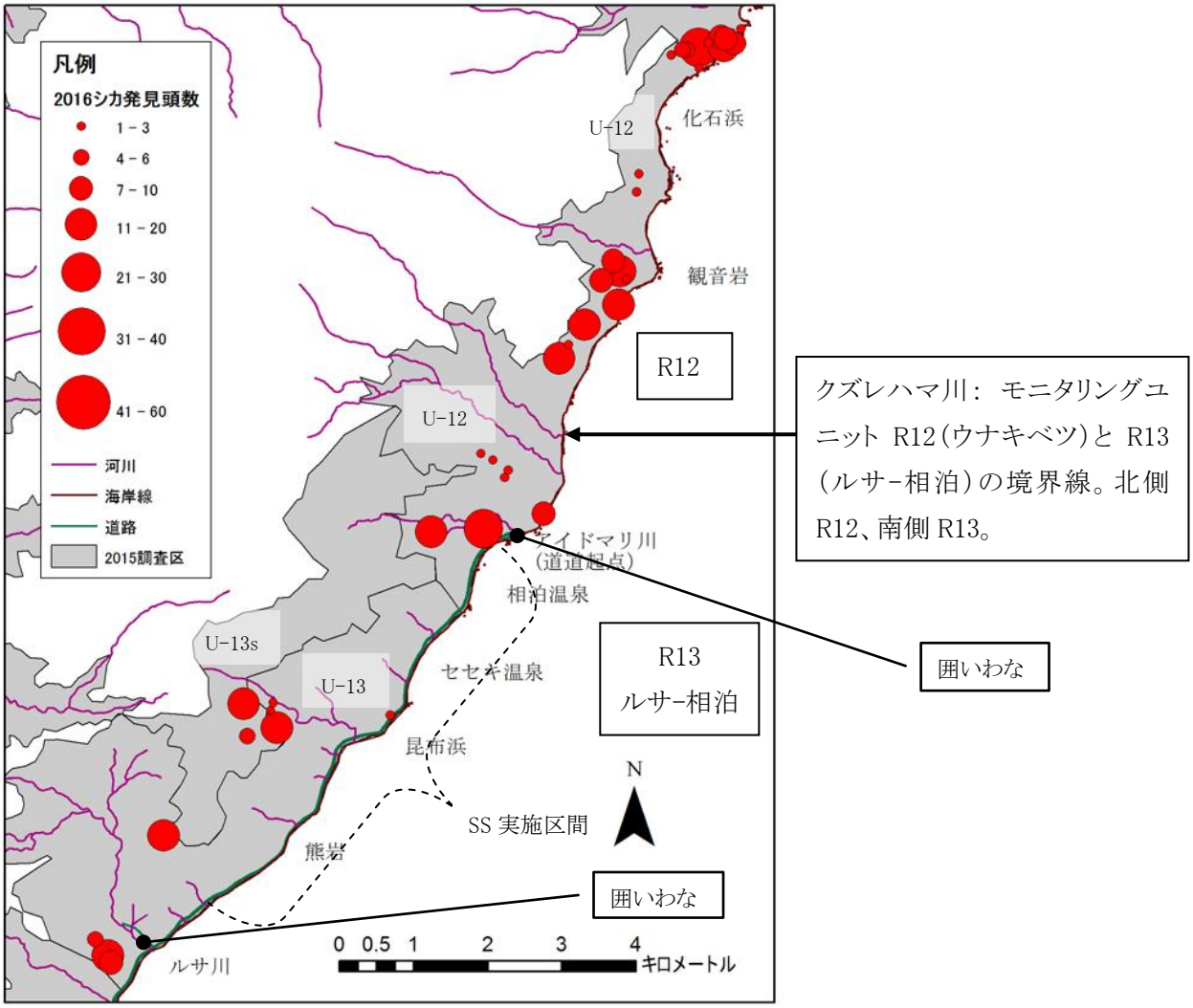

図 3. 2016 年ヘリコプターカウント調査におけるエゾシカ発見位置（U-12, 13, 13s = R12 ウナキベツ + R13 ルサ-相泊）と H27 シカ年度シカ捕獲実施箇所.
相泊温泉とセセキ温泉の間の尾根を境界線に北側調査区が U-12、南側が U-13、U-13 の北西側（山側）が高標高調査区である U-13s.

２．方針

・流し猟式シャープシューティング（以下、流し猟式 SS）捕獲予定区間の災害による通行止め対策及び、道路のない相泊以北の捕獲の課題を解消するため、流し猟式 SS 及び相泊囲いわなの代替策として、船舶を使用した相泊以北の捕獲の実施について検討する。

・ルサ囲いわな（既設）については修繕し稼働させる。

・補助的に小型箱わなの運用を検討。囲いわなまで誘引できない群れの捕獲を想定。

※捕獲目標頭数合計：約20頭＋α（ルサ囲いわなにおける H27 シカ年度実績＋α）
※管理目標密度達成に必要な捕獲数：0～139 頭
（ヘリカウント見落とし率 0～50%と仮定）

３．捕獲事業内容案

①．囲いわなによる捕獲　（既設１・~~再設置１~~ ←災害のため休止）

●期間：　相泊は災害のため休止。
12 月～ルサ囲いわなの馴致・餌づけ。
12 月下旬～3 月末まで捕獲（ヒグマに注意しつつ 4 月末まで）

●実施候補地：ルサ川左岸（既設）。

●検討事項：　部外者による攪乱・事故の防止、道道通行止時の対応。
ルサは遠距離からの誘引方法。
補助的に小型箱わなの運用を検討。

●捕獲目標頭数：ルサ約 20 頭（H27 シカ年度実績）。

②．流し猟式 SS　←災害のため休止

③．船舶を使用した相泊以北の捕獲実験（相泊囲いわな及び流し猟式 SS の代替案）

●期間：　3～4 月中、週 1 回実施、計 8 回程度。

●実施候補地：観音岩及び化石浜（さらに北側での捕獲も可能）

●実施方法：　船外機 2 隻（捕獲船、回収船）で出航し、観音岩及び化石浜付近のシカを捕獲する。
船上からの捕獲や上陸しての捕獲を試行する。流氷の状況によっては、事前に複数地点で餌付けし、誘引された群れは頭数に関わらず発砲、捕獲する。3 月中は餌付けを試行。
捕獲船 4 名（射手 3 名+観測手）、回収船 4～5 名（射手 1 名含む）、計 8～9 名で実施。

●検討事項：　船上からの捕獲の効率性
上陸の安全性

捕獲個体が多数の場合の回収は海上牽引
流氷が接岸している状況では実施できない

４．今後の検討課題

●相泊漁港以北の崩浜南部(カモイウンベ川･クズレハマ川付近)での捕獲作業の進め方
●ウナキベツ付近の越冬群と相泊以南の越冬群との冬期間の交流の有無の調査

C. 幌別-岩尾別地区

※資料 3-1 参考①の別表参照。

1. 経緯・課題

・H27 シカ年度は幌別河口囲いわな（3 年目）で 51 頭、岩尾別川河口の流し猟式 SS（3 年目）で 23 頭、岩尾別大型仕切柵（3 年目）で 32 頭、合計 106 頭を捕獲。
・H27 シカ年度の航空カウント数(モニタリングユニット S04＝ ヘリカウント調査区 U04 西部 + U05 + U06 = 29.08 km^2 で 176 頭）から、航空カウント後捕獲数 58 頭を差し引いた推定生息数は 118 頭。推定生息密度は 4.1 頭/㎢となり、「個体数調整の中長期目標」の第２段階目標である 5 頭/㎢を暫定的に達成。ただし局所的に高密度のエリアが残る（図 5)。
・現在、冬期のアクセスが困難な同地区東部（U-04 西部：硫黄山登山口付近～五湖の断崖）には捕獲圧がほとんどかかっていない状況。シカはイダシュベツ川河口に集中。
・同地区西部（U-06：岩尾別川～幌別川左岸）は観光地（フレペの滝、プユニ岬等）を含むため、銃猟の実施は困難。囲いわな設置適地もほとんど残っておらず、十分な捕獲圧をかけられていない状況。また境界線にある幌別河口囲いわなは、遺産地域外の U-07（幌別川左岸～オショコマナイ川右岸）のシカも捕獲していると考えられるため、U-06 のシカが想定以上に残っている可能性がある。

岩尾別
・仕切柵による捕獲では H27 シカ年度に 32 頭を捕獲。3 年間で合計 165 頭を捕獲し、仕切柵周辺のシカ生息密度は大幅に低下したと見られるが､仕切柵と岩尾別川河口の中間に 60 頭程度の群れが残っていると考えられる。
・岩尾別川河口では、流し猟式 SS で H27 シカ年度に 23 頭捕獲。河口と仕切柵間の群れの一部は、今後も流し猟式 SS で捕獲可能と考えられる。

幌別
・幌別川囲いわなで H27 シカ年度に 51 頭を捕獲。借地の事情で 3 月中旬の捕獲効率が高い時期に捕獲を終了した。誘引したが捕獲されずに残った個体がいる。

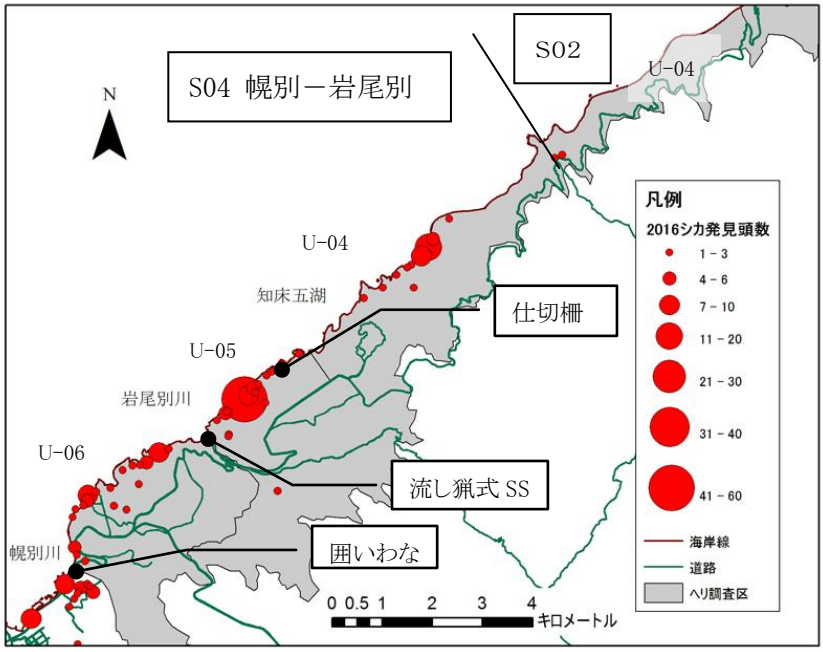

図 5. 2016 年航空調査におけるエゾシカ発見位置（U-04, 05, 06）と H27 シカ年度捕獲実施箇所.

２．方針

岩尾別

・岩尾別川河口に集結する群れの捕獲に重点を置く。囲いわなは設置せず（撤去）、複数の箱わなと流し猟式ＳＳによる捕獲を行う。早い時期（12 月上旬）から餌づけを行い、十分な順化期間を設定する。

・岩尾別台地海岸沿い（岩尾別河口右岸～仕切柵間）に分布するシカを仕切柵に誘導し捕獲する。餌づけを海岸線沿いの広範囲に行う。シカの逃走経路が海岸の崖沿いに限定されやすい 2 月の厳冬期に、仕切柵西側エリアを対象に、仕切柵を利用した大規模な巻き狩りを試験的に行う。

幌別

・幌別囲いわなは、前年度の規模と配置で捕獲を継続する。

・プユニ岬（見晴橋付近）の林内に複数の箱わなを設置し、捕獲と作業員の入林による軽度の林内攪乱により幌別河口囲いわな方向へのシカの移動を促す。

※捕獲目標頭数合計： 約 100 頭（H27 シカ年度実績を参考）

管理目標密度達成に必要な捕獲数： 0～208 頭

（ヘリカウント見落とし率を 0～50%と仮定）

３．捕獲事業内容案

岩尾別

①仕切柵を用いた大型囲いわな式捕獲

●期間:　12～4 月

●実施候補地:　岩尾別地区（海岸側ササ地）

●仕様等:　大面積のササ地を仕切柵で囲い、囲いわなのようにして捕獲。自動落下式ゲートと手動捕獲を組み合わせる。メール送信機能付自動カメラを設置し、捕獲の補助とする。捕獲個体の追い込みにかかる労力を軽減するため、シカが雪に肢を取られやすい厳冬期以外は、死体での搬出を優先する。

●検討事項等:　仕切柵より西側のエリア（岩尾別河口右岸～仕切柵間）に中規模な群れが残っていることから、広範囲で誘引を行うとともに、試験的な大規模巻き狩りを行うことで、シカを仕切柵へと誘導する。巻き狩りは積雪量が最も多い時期である 2 月に実施する（シカの逃走経路が崖沿いに限定されるため）。結果次第で次年度以降は仕切柵の改修や、銃器を用いた捕獲を検討する。

●捕獲目標頭数:　約 20 頭（H27 年度実績の 70%程度）

②流し猟式 SS（積雪期・岩尾別川河口）

●期間:　1～3 月 （12 月から餌付け、1 月から週 1 回程度捕獲）

●実施候補地:　岩尾別ふ化場取り付け通路（約 0.6 km）

●検討事項:　使用するライフル銃の口径・性能（対岸斜面林内のシカの狙撃を想定）

●捕獲目標頭数:　約 20 頭（H27 年度実績と同程度）

③箱わなによる捕獲（新規・岩尾別川河口）

●期間:　1～3 月 （12 月から餌付け、SS と並行して実施）

●実施候補地:　岩尾別ふ化場取り付け通路（約 0.6 km）沿い

●検討事項:　設置する箱わなの数、SS の餌づけ誘引への悪影響の有無

●捕獲目標頭数　約 10 頭（H27 年度隣接地域における箱ワナ捕獲実績）

幌別

①囲いわなによる捕獲　（再設置 1 箇所）

●期間:　12 月中に再設置、1 月～3 月に餌付け・捕獲

●実施候補地:　幌別川河口（再設置・4 年目）

●検討事項等:　3 月下旬の捕獲期間の確保
囲いわな撤去後の箱わなによる捕獲

●捕獲目標頭数:　約 40 頭（H27 年度実績の 70％程度）

②箱わなによる捕獲（新規）

●期間:　　1～3 月（幌別河口囲いわなより、わざと遅らせて開始する）

●実施候補地:　プユニ岬（見晴橋）付近山側の針葉樹林内 2～3 箇所

●検討事項等:　箱わなの維持管理に伴う入林の攪乱を嫌ったシカが幌別河口方面へ狙い通り移動するか、あるいは箱わな周辺に誘引・定着してしまうか。

●捕獲目標頭数: 約 10 頭（H27 年度隣接地域における箱わな捕獲実績）

４．今後の検討課題

・五湖より東側のカムイワッカ付近までのエリア（U-04 西部）での捕獲の進め方。冬期閉鎖中（5 月を想定）の道道知床公園線カムイワッカ方面での流し猟式 SS の検討。

・フレペの滝～ポロピナイ間（U-06）の海側崖沿い草原地帯で越冬している群れの捕獲の進め方。複数箇所での小型箱わな、もしくはくくりわなの検討。移動式わなとメール送信機能付自動カメラの組み合わせによる管理の省力化。

・低密度状態を保つための捕獲手法の検討。岩尾別地区の百平方メートル運動地内での狙撃、移動式わなによる捕獲など。

・道路沿いにおける麻酔銃を用いた捕獲検討。メス成獣を選択的に不動化し、少数ずつエゾシカファームに移送する。4 名程度で実施。冬期ではなく無積雪期に、春期～秋期の長期間実施する。実施日時を固定せず、条件の良い時間と場所を現場で判断し実施する。月に 2 回程度を想定だが、道路沿いに出やすいなど条件の良い月には捕獲を集中させる。猟銃を使えないエリアのメス成獣を着実に減らす効果が期待される。
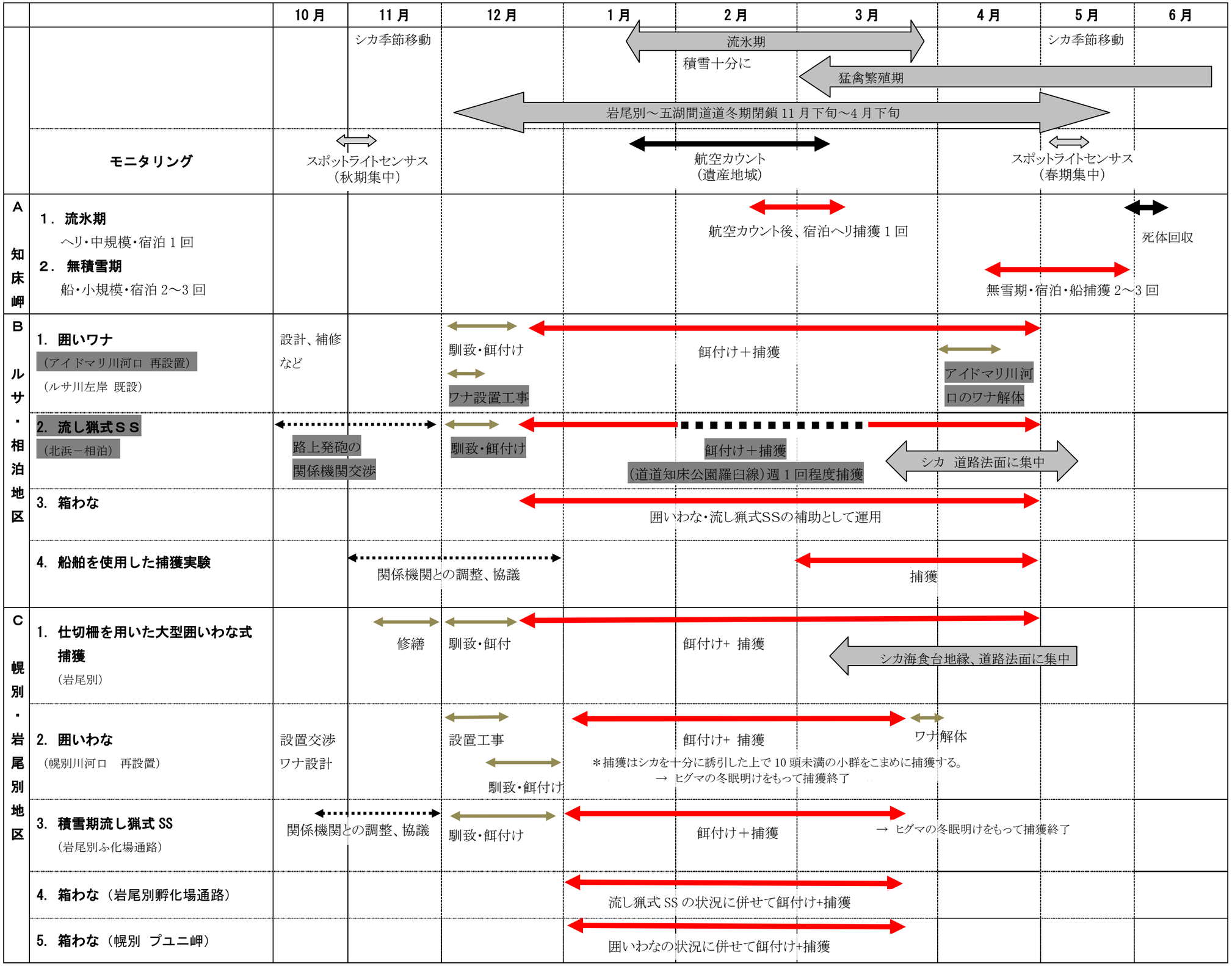
表 2. 平成 28 シカ年度　遺産地域内におけるエゾシカ捕獲事業（案）